
CORONA衛星写真からみたウズン・タティ遺跡付近

西域南道扞弥国とのかかわり

Uzun Tati Ruins in Relation to “扞弥” Country on the Paleo Silk Road in the Southern Margin of the Tarim Basin, Based on Observation from CORONA Satellite Photos

相馬秀廣

【要旨】タリム盆地南縁中央付近に位置し、漢書『西域伝』の扞弥国の王城であった可能性が指摘されている、ウズン・タティ遺跡付近を主な対象として、米軍偵察衛星写真の判読などにより、現状、立地条件などを検討した。その結果、次のような点が明らかとなった。

1. 縮尺約1/30万5千のCORONA衛星写真の判読およびデジタル化は、遺跡の立地条件などを検討する上で、極めて有効である。
2. 現在の策勒オアシスから北17km付近のウズン・タティ遺跡にかけては、明瞭な分流跡や、一部に建物跡を伴う方形の区域が断続的に分布している。それらの区域は、農業的な土地利用が行われていた遺跡群と判断され、かつては山麓一河畔型オアシスが広がっていた。今後具体的な現地調査が必要であるが、この付近に漢書『西域伝』にある扞弥国の王城が存在した可能性が極めて高い。
3. ダンダン・ウイリク遺跡は大規模砂丘群と中規模砂丘群の境界付近に立地し、付近に明瞭な流路跡は認められない。この遺跡は、周辺で大規模な農業活動を展開しにくく、扞弥国の王城遺跡とは考えにくい。
4. ニヤ遺跡、カラドン遺跡、ダンダン・ウイリク遺跡など、現在の山麓オアシスから大きく下流側に離れて存在する遺跡は、今後衛星写真判読などを通して、西域南道との関わりのみでなく、南北方向の交通路との関連を含めて検討することが必要である。

1. はじめに

中国北西部、新疆ウイグル自治区のタリム盆地（図1）には、中国最大の砂沙漠であるタクラマカン沙漠が分布する。かつてのシルクロードがその南北両縁を通過していたことはよく知られている。タリム盆地北縁を通過していた西域中道（天山南路）は、漢書『西域伝』によれば、盆地北側の焉耆（エンギ、かつてのカラシャール）を経て盆地に入り、尉犁（コルラ）、西域都護府が長く置かれていた輪台（ブグル）、龜茲（クチャ）、姑墨（アクス）、巴礎（バチュー）を経て疏勒（カシュガル）に達していた。かつての王城が基本的には現在のオアシス内に分布している（相馬、印刷中）ことから、そのルートは基本的には現在の国道にほぼ近いとする点で研究者の見解はほぼ統一されている。

一方、盆地南縁を通過していた西域南道は、同じく漢書『西域伝』によれば、鄯善、且末、精絶、扞弥、于闐（現在の和田、ホータン）、皮山（ピシャン）、莎車（ヤルカンド）の各国を経て、疏勒に達していた。このうち、かつての王城がほぼ現在のオアシス内に存在する于闐－疏勒間は、現在の国道にほぼ近い位置を通過していたものと考えられている。しかし、且末－扞弥間のルートに